

インスタント・シニアプログラムの 体験学習を実施しての一考察

A consideration after experience learning of the instant senior program instruction

井口 ひとみ

はじめに

日本における高齢化の動きは西欧先進国に比べ急速に進行しており、介護の対象者は様々な身体状況の問題を抱えながら日常生活を過ごしている。そのような情勢の中、高齢社会への対策の一環として高齢者や社会的にハンディキャップのある人への正しい知識と理解を深めるため、さらには環境改善の一助とするためにカナダ・オンタリオ州政府が開発した研修プログラムに「スルー・アザー・アイズ」というシニア体験プログラムがある。このシニア体験プログラムを同州政府から導入を認められた日本ウエルエーシング協会は、シニア体験プログラムを通して、高齢者や何らかの身体的にハンディキャップのある人々に対する理解を促進し、知識や理解が具体化されるように工夫している。体験を通して、高齢者への知識、理解、接遇、環境改善などを促進することを目的として開発され活用されている。

そこで、今回、介護福祉士の基礎教育において、このプログラムを活用して体験学習を取り入れてみた。それらを通して学生の意識や行動の時間経過に伴う変化や、学びを考察し、介護福祉士の基礎教育におけるインスタント・シニアプログラムの体験学習の必要性について検討することを主な目的とした。

1. 研究目的

- (1) 本調査は、インスタント・シニアプログラムを体験することにより、学生の高齢者に対する意識や態度がどのように変化したかを明らかにする。
- (2) 学生の学び、および(1)から介護福祉士の基礎教育におけるインスタント・シニアプログラムについて考察する。

2. 研究方法

- (1) 対象
本学に2002年4月に入学した1年次生計57名
- (2) インスタント・シニアプログラムの演習方法

演習の目標

- ①インスタント・シニアプログラムを体験することにより、高齢者や障害を持った人に対する意識や態度がどのように変化したかを考える。
- ②人にやさしい環境とは、どのようなものが必要か。日常利用する駅（今回はモノレール利用）や、インスタント・シニアプログラムを通して考える。
- ③これらの体験から、介護福祉士として利用者の生活を援助するための学習の動機付けができる。
- ④今回の体験から、どのようなことに配慮していくことが必要かを考えることができる。

以上を演習の主な目標とした。

I オリエンテーション

高齢者の身体機能の特性について説明する。

II 装着する器具の意味

特殊なゴーグルやウエイトなど8種類の器具を装着し、人為的に高齢者の身体状況を作り出し、日常行っていることを体験させることにより、高齢者を取り巻く環境の厳しさや心理的变化を体験させるものである。それぞれについての意味を説明する。

III 実施の方法

1) 事前アンケート

（日本ウエルエージング協会作成を使用）内容は高齢者が様々な動作や活動をする時の困難度の推測値や高齢者に対する意識・態度である。

2) オリエンテーション

（実施の方法、課題ーチャレンジリスト用紙にそって説明する）

3) 器具の装着

4) 体験実行

実施する場所に依じて下見をし、体験する課題を作成し、時間内で体験できるようにした。基本的には高齢者の身体に現れる老化が実感できるような課題を作成した。問題は、25項目作成し、体験してもらった。2人1組で1人が体験し1人が介助者役で、危険が生じないようにそばに付き添わせた。1グループの人数は18名、教員2名と事務局が1名の計3名で付き添った。

5) 器具の脱着

6) 事後アンケート(日本ウエルエージング協会作成を使用)⁶⁾及び、自由記載のレポート

7) まとめ

8) 1ヶ月後アンケート(日本ウエルエージング協会作成を使用)⁶⁾

3. 結果

a. インスタント・シニア体験及び時間経過に伴う高齢者に対する意識の変化(図1~12)

(1) 高齢者は親切だと思う

この設問に対しては、「1 とてもそう思う」という回答は、事前では16.7%であり、事後では、17%であり、1ヶ月後では18.4%であった。「2 ややそう思う」の回答を合わせると、事前では83.3%であり、1ヵ月後では、77.6%の人が維持していた。この結果は、日本ウエルエージング協会が実施した調査の事後、1ヵ月後と同様な傾向を示した。

(2) 高齢者はわがままだと思う

この設問に対しては、「1 とてもそう思う」「2 ややそう思う」の回答を合わせると、事前では57.4%であったが、事後は20.7%に減少した。1ヵ月後には38.8%とやや高い傾向がみられている。この傾向は、日本ウエルエージング協会の調査と同様であった。

(3) 高齢者の行動をおせっかいだと感じる

この設問に対しては、「1 とてもそう思う」「2 ややそう思う」の回答を合わせると、事前では18.5%であったが、事後では15.1%に減少し、1ヶ月後も14.3%であった。この傾向は、日本ウエルエージングの調査と異なり、事後の経験よりも1ヵ月後には減少していた。

(4) 高齢者は不活発だと思う

この設問に対しては、「1 とてもそう思う」が、事前では13%であったが、事後は11.3%とわずかに減少していた。1ヵ月後では、6.1%とさらに減少していた。この傾向は、日本ウエルエージング協会の調査とほぼ同様であった。

(5) 高齢者の気持ちを理解できると感じる

この設問に対しては、「1 とてもそう思う」が、事前では7.4%であったが、事後は30.1%へと増加していた。しかし、1ヵ月後には、6.2%と低い傾向となっていた。この傾向は、日本ウエルエージング協会と事前、事後の調査は同様であったが、1ヵ月後は事前よりも減少していた。

(6) 高齢者は遠慮しているなど感じる

この設問に対しては、「1 とてもそう思う」が、事前では22.2%であったが、事後は

32.1%と増加していた。しかし、1ヶ月後には、18.4%と減少していた。この傾向は、事前、事後は日本ウエルエージング協会の調査と同様であったが、1ヵ月後には事前よりも減少していた。

(7) 高齢者の行動は人に迷惑をかけていると感じる

この設問に対しては、「1 とてもそう思う」「2 ややそう思う」の回答を合わせると、事前では24.1%であったが、事後では28.4%とわずかに増加していた。1ヵ月後でも20.4%の人が「高齢者は人に迷惑をかけている」という態度を示した。この傾向は、日本ウエルエージング協会の調査と同様であった。

(8) 高齢者の行動は、人をイライラさせると感じる

この設問に対しては、「1 とてもそう思う」が、事前では0%であったが、事後では3.8%に増加した。1ヵ月後には0%に減少していた。この傾向は、日本ウエルエージング協会の調査と同様であった。

(9) 高齢者の行動を危険だ（あぶなっかしい、ハラハラする）と感じる

この設問に対しては、「1 とてもそう思う」が、事前では25.9%であったが、事後では52.8%と増加した。1ヵ月後は、40.8%の人が高齢者の行動は危険であるということを示した。この傾向は、日本ウエルエージング協会の調査と事前、事後は同様であったが、1ヵ月後には事前よりも増加していた。

(10) 高齢者は援助を必要としていると思う

この設問に対しては、「1 とてもそう思う」が、事前では25.9%であったが、事後では52.8%と増加した。1ヵ月後は12.2%と低い傾向が示された。この傾向は、日本ウエルエージング協会の調査と事前、事後は同様であったが、1ヵ月後には事前よりも減少していた。

(11) 高齢者は役に立たないと思う

この設問に対しては、「1 とてもそう思う」「2 ややそう思う」の回答を合わせると、事前では11.1%であったが、事後も13.2%と変化はみられなかった。1ヶ月後は、6.1%と低い傾向がみられた。この傾向は、日本ウエルエージング協会の調査と同様であった。

(12) 高齢者は円熟していると思う

この設問に対しては、「1 とてもそう思う」が、事前では16.7%であったが、事後では13.2%とやや減少した。1ヵ月後は、16.3%とほぼ事前に近くなっている。日本ウエルエージング協会の調査においては、事前、事後、1ヵ月後と徐々に増加傾向を示していた。

図 1

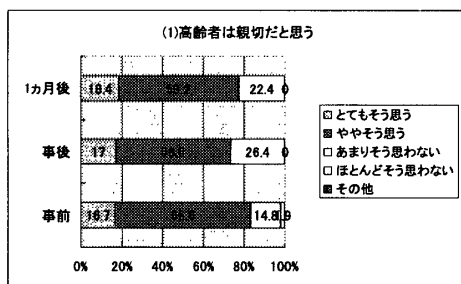


図 7

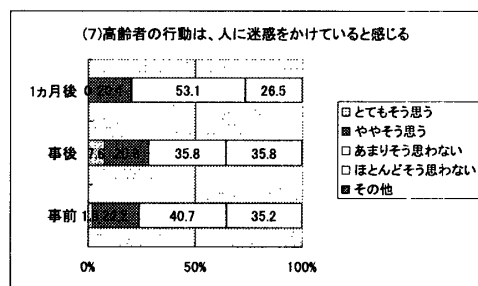


図 2

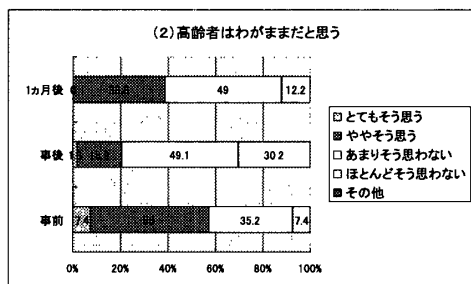


図 8

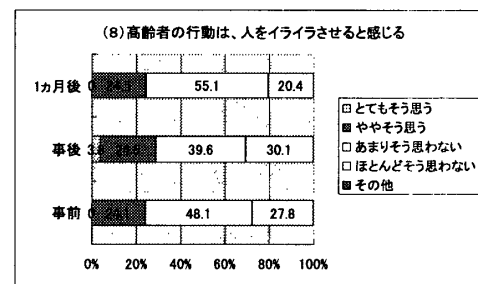


図 3

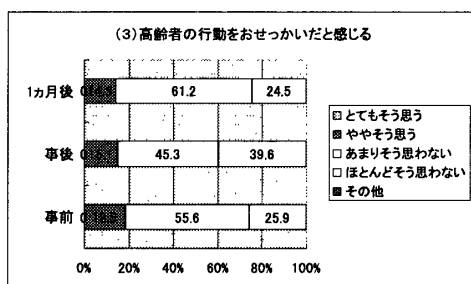


図 9

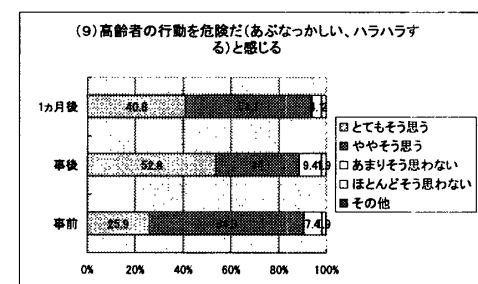


図 4

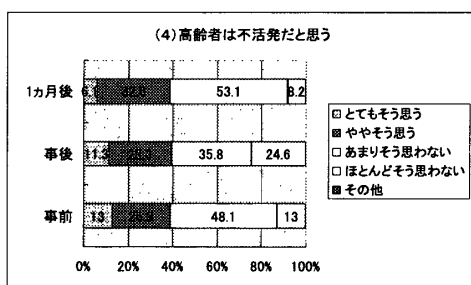


図 10

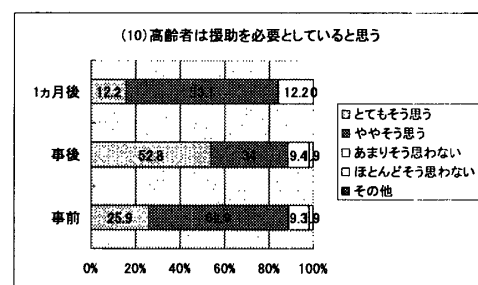


図 5

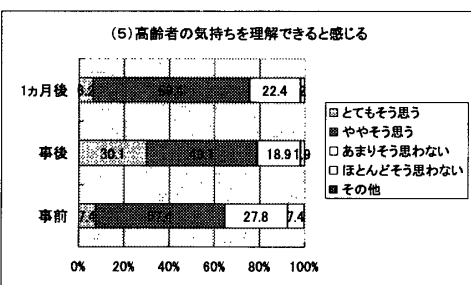


図 11

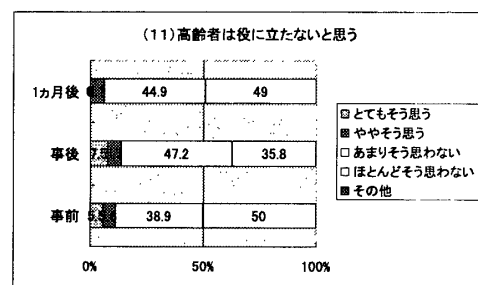


図 6

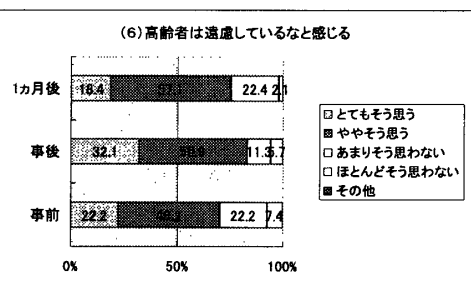


図 12

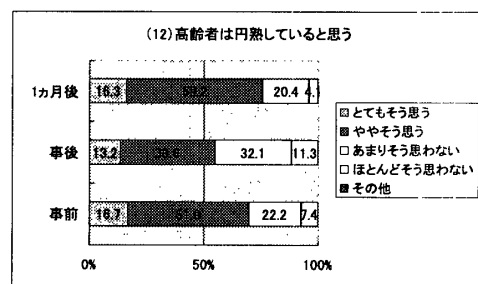


図 1～12 インスタント・シニア体験及び時間経過に伴う高齢者に対する意識の変化

b. 高齢者に対する態度のインスタント・シニア体験及び時間経過に伴う意識変化(図13~19)

(1) 高齢者の相談相手になること

この設問に対しては、「1 とてもそう思う」が、事前では37%であったが、事後では54.7%と増加した。1ヵ月後は、51%となっていた。この傾向は、日本ウエルエージング協会の調査と同様であった。

(2) 電車やバスで高齢者に席を譲ること

この設問に対しては、「1 とてもそう思う」が、事前では53.7%であったが、事後では83%と増加した。1ヵ月後も75.5%と高い傾向がみられた。この傾向は、日本ウエルエージング協会の調査と同様であった。

(3) 高齢者に話しかけること

この設問に対しては、「1 とてもそう思う」が、事前では37%であったが、事後は50.9%と増加した。1ヵ月後は、36.7%と減少していた。この傾向は、この傾向は、日本ウエルエージング協会の調査と事前、事後は同様であった。1ヵ月後は事前よりも減少していた。

(4) 高齢者の考えや意見を聞くこと

この設問に対しては、「1 とてもそう思う」が、事前では55.1%であったが、事後は60.4%とやや増加した。1ヵ月後は、53%と減少していた。日本ウエルエージング協会の調査と事前、事後は同様な傾向であったが、1ヵ月後は事前よりも減少していた。

(5) 高齢者の心身の状態に配慮した(気を配った)行動をすること

この設問に対しては、「1 とてもそう思う」が、事前では51.9%であったが、事後は77.4%と増加した。1ヶ月後は、57.1%と減少した。この傾向は、日本ウエルエージング協会の調査と同様であった。この傾向は、日本ウエルエージング協会の調査と同様であった。

(6) 高齢者の行動にクレーム(文句や注文)をつけること

この設問に対しては、「1 とてもそう思う」「2 ややそう思う」の回答を合わせると、事前では18.6%であったが、事後は13.1%とやや減少した。1ヵ月後は、14.3%であった。この傾向は、日本ウエルエージング協会の調査では、ほとんど時間経過変化は示されていなかった。

(7) 高齢者に何か手助けすること

この設問に対しては、「1 とてもそう思う」が、事前では46.2%であったが、事後は75.5%に増加していた。1ヵ月後に49%に減少していた。この傾向は、日本ウエルエージング協会の傾向と同様であるが、事後から1ヵ月間での減少幅は多かった。

図13

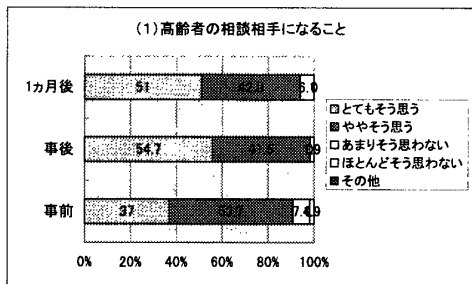


図17

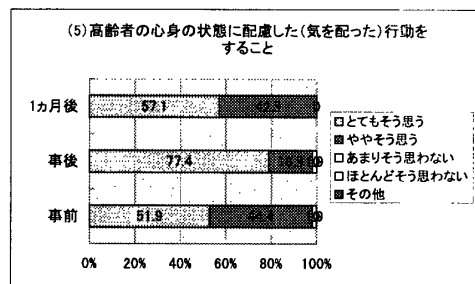


図14

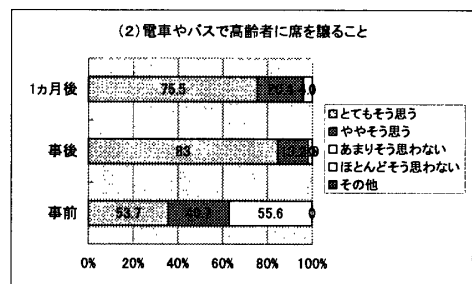


図18

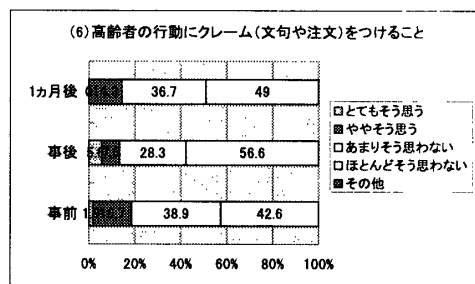


図15

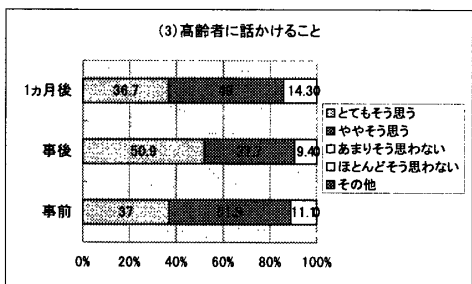


図19

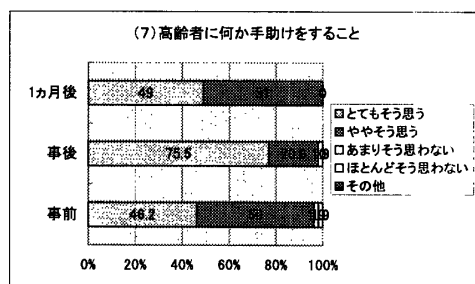


図16

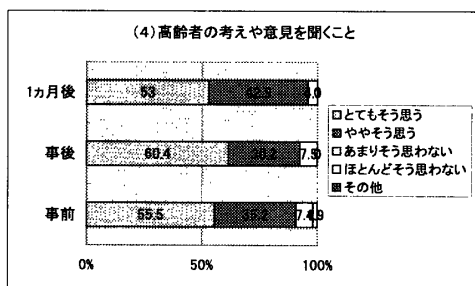


図13～19 高齢者に対する態度のインスタント・シニア体験及び時間経過に伴う意識変化

C. 高齢者に対する態度のインスタント・シニア体験及び時間経過に伴う行動変化(図20~26)

(1) 高齢者の相談相手になったこと

この設問に対しては、「1 よくあった」「2 時々あった」の回答をあわせると、事前では29.6%であり、1ヶ月後では38.8%とやや増加していた。日本ウエルエージング協会の調査と逆の傾向を示した。

(2) 電車やバスで高齢者に席を譲ったこと

この設問に対しては、「1 よくあった」「2 時々あった」の回答をあわせると、事前では27.8%であり、1ヵ月後では18.3%と減少していた。この傾向は、日本ウエルエージング協会の調査と同様であった。

(3) 高齢者に話しかけたこと

この設問に対しては、「1 よくあった」「2 時々あった」の回答をあわせると、事前では55.5%であり、1ヵ月後では53.1%と事前よりもわずかに減少していた。日本ウエルエージング協会の調査と逆の傾向を示した。

(4) 高齢者の考えや意見を聞いたこと

この設問に対しては、「1 よくあった」「2 時々あった」の回答をあわせると、事前では46.3%であり、1ヵ月後では48.9%と事前よりもわずかに増加していた。この傾向は、日本ウエルエージング協会の調査と同様であった。

(5) 高齢者の心身の状態に配慮した(気を配った)行動をしたこと

この設問に対しては、「1 よくあった」「2 時々あった」の回答をあわせると、事前では38.9%であり、1ヵ月後では55.1%と増加していた。この傾向は、日本ウエルエージング協会の調査と同様であった。さらに、増加の幅が大きかった。

(6) 高齢者の行動にクレーム(文句や注文)をつけたこと

この設問に対しては、「1 よくあった」「2 時々あった」の回答をあわせると、事前では11.1%であり、1ヵ月後では2%と低い傾向が示された。この傾向は、日本ウエルエージング協会の調査と同様であった。

(7) 高齢者に何か手助けをしたこと

この設問に対しては、「1 よくあった」「2 時々あった」の回答をあわせると、事前では46.3%であり、1ヵ月後では40.8%と低かった。この傾向は、日本ウエルエージング協会の調査と同様であった。

図20

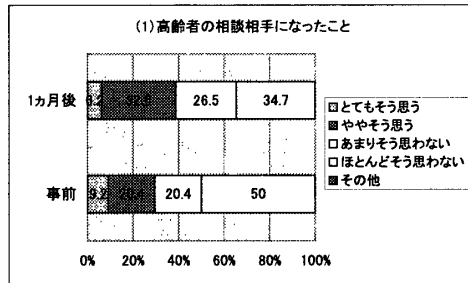


図24

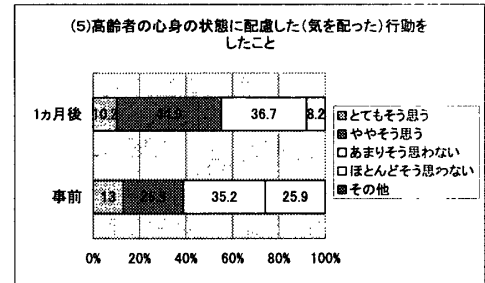


図21

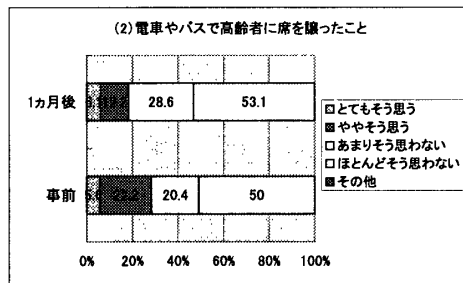


図25

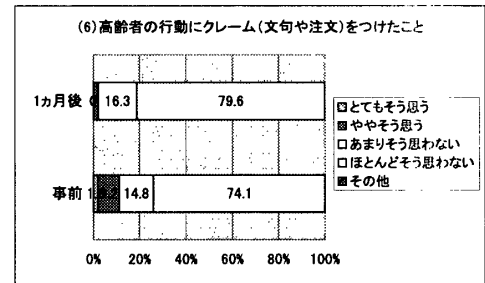


図22

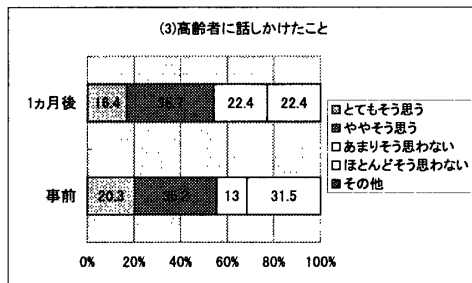


図26

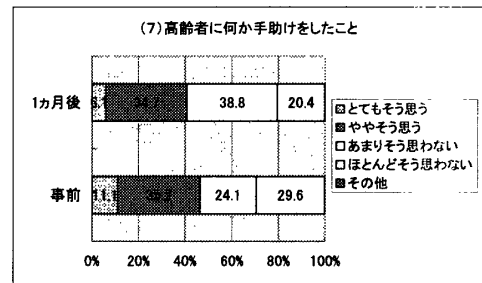


図23

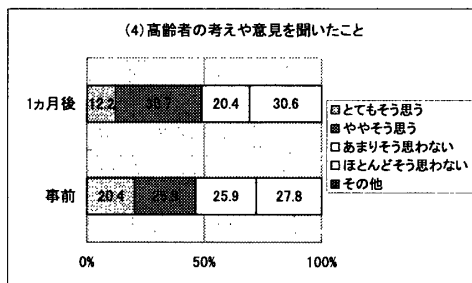


図20～26 高齢者に対する態度のインスタント・シニア体験及び時間経過に伴う意識変化

d. 身体機能、行動についてのインスタント・シニア体験及び時間経過に伴う評価の比較
(図27～28)

困難度が高く評価された活動は、事前では「腕を伸ばす事」「立ち上がる事」「階段を降りること」であり、事後では「見ること」「色を識別すること」「腕を曲げること」「全体としての身体の動き」「パンフレット・スタンドから必要なパンフレットを選ぶ」「公共の案内板を読む」「外出先、外出時での行動」であった。約45%の活動において事後の活動で困難度が高くなっていたが、1ヶ月後では、約87%の活動について事前に評価した困難度に近づいていた。

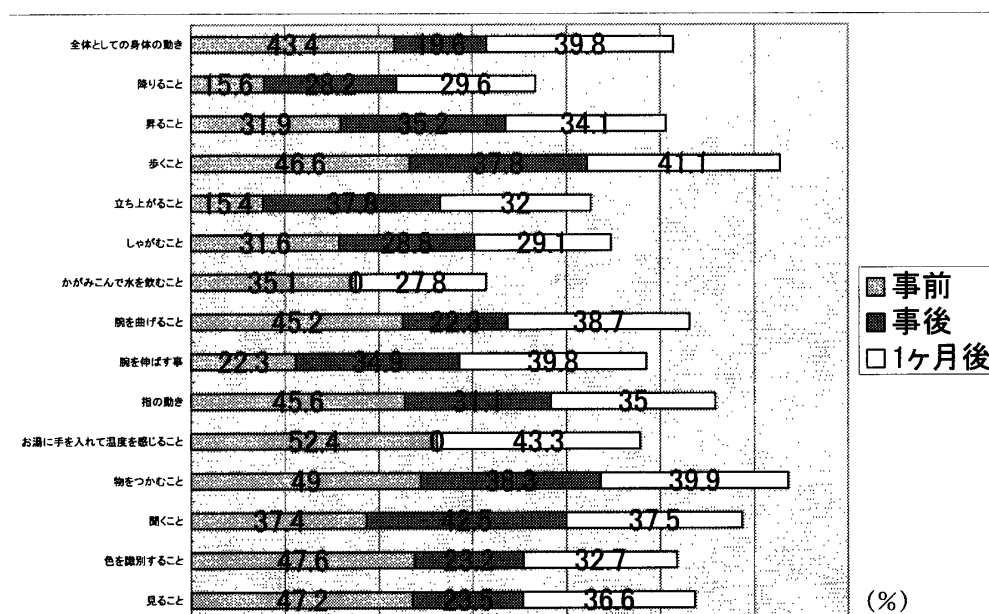


図27 身体機能、行動についてのインスタント・シニア体験及び時間経過に伴う評価の比較

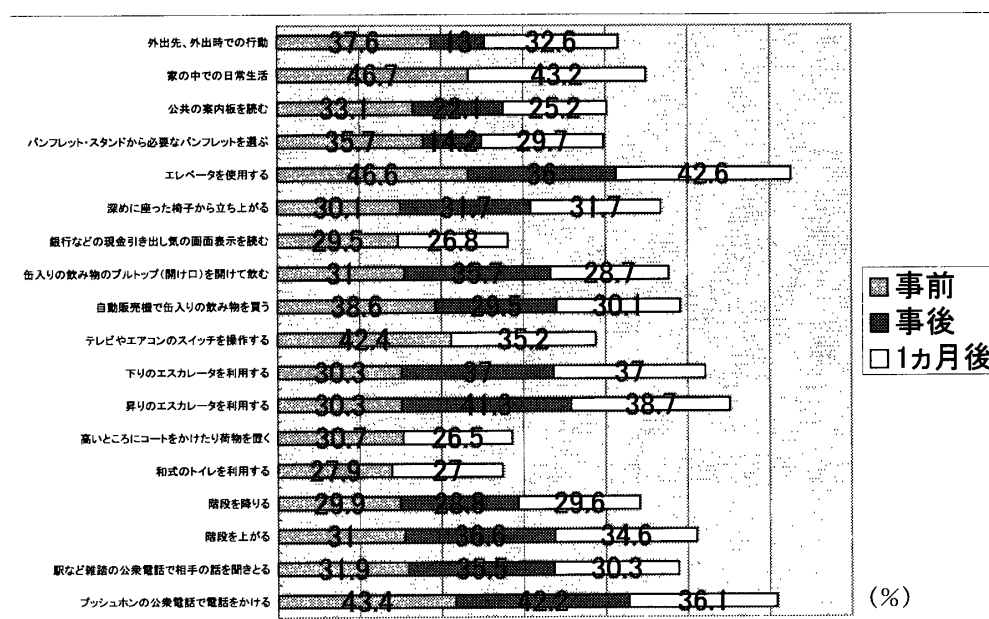


図28 身体機能、行動についてのインスタント・シニア体験及び時間経過に伴う評価の比較

e. 自由記載から

ほとんどの学生が、具体的な体験の感想とともに、体験を通し高齢者・障害者の気持ちが少しわかったような気がする。と述べていた。また、相手の気持ちになっていきたい。早く一人前の介護者になりたい。外を元気で歩いている高齢者をみると頑張っているのだなあと思うようになった。等述べていた。

f. 介護1段階実習を終了した学生の意見から

介護1段階実習を終了した学生数名に「インスタント・シニアプログラムを行ったことが、1段階実習の中で影響したものはあるか。」ということ面接したところ以下のことが、感想として述べられた。

- ・インスタント・シニアプログラムで体験した、階段の昇降・段差が非常に不自由であり、不安だったことが、印象に残っていて、施設中でのスロープやわずかな段差のところを介助する際にも、とても気をつけた。
- ・インスタント・シニアプログラムを外で行ったことと、室内で行うことも違いがあるので室内での体験も多くやってみたかった。
- ・視力が低下している利用者や、手を引いて介助する利用者に対して、その人のペースに合わせることで、インスタント・シニアプログラムの体験をしたことによってイメージできて実習できた。また、説明するときに具体的に行動しながら示すこともできた。
- ・視力が低下していると思われる利用者に対して、利用者の足元を見ながら、ペースも合わせるように考えることができた。身体イメージが付きやすかった。
- ・インスタント・シニアプログラムを体験したときは、介助者としてどうしたらよいかは考えられなかったが、その後いろいろ勉強して、あの時どうすればよいか考えることができたと思う。
- ・外で行わなくても学内の演習中に装具を装着して体験できることは意味深い。
- ・インスタント・シニアプログラムで体験した高齢者の状態から、耳が聞こえにくいから大きな声で話そう、視力も低下しているので注意しよう、歩く速度についても私がペースを合わせよう、足元を見ながら歩くようにしようということが、実習の時に役立った。

等、肯定的な意見を述べていた。

3. 考察

アンケート調査の「高齢者に対する意識や態度について」の事前、事後の調査において、体験後には高齢者に対する意識や態度が好転するという結果が得られた。このことは日常経験することがなかった不自由さや不安を体験することによって意識の変容が見られたと考える。

しかし、1ヵ月後では今回のアンケートにおいて体験の結果の持続性を判断することは難しかった。日本ウエルエージング協会の調査では「6ヵ月後の期間が経過した後もインスタント・シニアプログラムの効果は持続している。」⁶⁾と報告されていたが、長期的な体験の効果について検討するには、今回使用したウエルエージング協会作成のアンケート項目では非常に難しいことがわかった。身体機能・行動についての評価については事前の困難度の評価と事後、1ヵ月後では、あまり大きな変化はみられていなかった。したがって、体験することが、高齢者・障害者の身体機能・行動についての評価に大きく影響していないことがいえる。

学生の自由記載からは、演習の目標とした、「①インスタント・シニアプログラムを体験することにより、高齢者や障害を持った人に対する意識や態度がどのように変化したかを考える。」については、高齢者の気持ちが少しわかったような気がする等。ほとんどの学生が述べていたことから、体験を通して変化したと考える。「②人にやさしい環境とは、どのようなものが必要か。日常利用する駅（今回はモノレール利用）や、インスタント・シニアプログラムを通して考える。」ということでは、環境についての講義前の導入としてはあまり、具体的な目標設定でなく何か気づけば良いというレベルの目標設定になっていた。そのため学生の学びにも具体性がないものが多かったといえる。「③これらの体験から、介護福祉士として利用者の生活を援助するための学習の動機付けができる。」については、学習の初期であり、多くの学生は相手の立場を理解できるようになりたい、これからの授業に役立てたい、これからもっと学んでいきたい。等動機付けの役割が果たすことができた。しかし、「④今回の体験から、どのようなことに配慮していくことが必要かを考えることができる。」については、今回の学習の段階では非常に困難であった。体験中も介護者の役割はほとんどできない状況であり教員側が多く注意を要しながらの実施であった。介護の方法について、例えば杖歩行の介護について等さらに深めた学習をした時期でないと、単に心理面と身体面の困難さを強調するのみになり、専門性を養うべき目標が達成されないという結果につながってしまう。

したがって今後インスタント・シニアの体験について演習する場合は、杖歩行介助等の学習が終了していることは最低限必要である。また、今回のように環境についても学習する意味では、環境についての学習が終了していたほうが体験をさらに深めることができると考える。1年生の初めの時期に実施することは介護福祉士としての学びの動機付けとしての目標の達成だけに偏りがちになりやすく、ある程度基礎学習が終了した時点のほうが望ましいと考える。介護技術演習時に必要に応じてインスタント・シニアの体験器具を装着して、利用者役になってもらっているが、その使い方を今後行うことにより、具体的な学習の中で利用者側としての体験を深めることにつながっていくと考える。

デールの、「具体的経験は常に正しく一般化されとは限らないので、正しい一般化のしかたを教える必要がある」と述べていることと同様に、体験学習から得た結果はあくまでも学生

個人の主観的な認識であり、この個人的体験と一般的法則との関係を明確にしなければ単なる先入観として再生される可能性があるといえる。マッケイらは、学生の共感能力の育成には、批判的思考の訓練が必要であるとしている。つまり、高齢者・障害者の心理を知るための方法は、体験することだけではない。今回、ウエルエージング協会のアンケート項目を追試して体験の効果をみようと実施したが、そこでは明らかな効果を測定することができなかった。介護福祉専攻・学生の効果を測定するには今後の検討が必要である。

介護福祉士の基礎教育において体験とは何か、体験しなくても学べることは何か、追体験などの代替え学習の方法は何か、体験を一般化させる教育方法とは何か、体験学習の学習効果はどのように評価するのか等、今後教材研究等明らかにしていく必要がある。

4. まとめ

インスタント・シニアプログラムの体験演習を実施し、アンケート調査及び自由記載のレポートから以下のことがわかった。

- (1) インスタント・シニアプログラム体験の事前、事後の「高齢者に対する意識や態度について」調査において、体験後には高齢者に対する意識や態度が好転した。このことは、特殊なゴーグルやウエイトなど8種類の器具を装着し、人為的に高齢者の身体状況を作り出し、日常行っていることを体験させることにより、高齢者を取り巻く環境の厳しさや心理的变化を体験させるという目的によって開発されているプログラムの効果であると考えられる。
- (2) インスタント・シニアプログラム体験1ヵ月後の調査において、体験の結果の持続性を判断することは難しかった。これは、様々な専門的な学習が進行してきており、一時的かつ急激に老化状態を作り出すことから、適応を繰り返しながら進行する実際の老化に比べ極端な体験となっていることは否定できない。これらの影響も考えると1ヶ月後という今回のアンケート項目の状況では、体験が持続すると判断することは、難しかったと考える。
- (3) インスタント・シニアプログラム体験が、高齢者・障害者の身体機能・行動についての評価に大きく影響していないことがわかった。
- (4) 自由記載のレポートから、多くの学生は「相手の立場を理解できるようになりたい、これからの授業に役立てたい、これからもっと学んでいきたい。」等、動機付けの役割が果たすことができた。これは、1年生前期の初期であったことから、学習への動機付けにつながったといえる。
- (5) インスタント・シニアプログラム体験は、目標設定によって実施する時期、周辺の学習状況によって様々な目標を設定して応用できる可能性があると考ええる。

- (6) 介護技術演習時、必要に応じてインスタント・シニアの体験器具を装着して、利用者役になることは、多くの課題と時間を使わなくても、体験を通して学びを深めることにつながると考える。今後もこの方法で、利用者役が器具装着することで学習の目標に適応できると考える。
- (7) 介護1段階実習終了後の数名の学生意見であるが、インスタント・シニアプログラム体験が実習時、利用者理解をするうえでの学びとなっていた。

5. 謝辞

今回のインスタント・シニアプログラムの体験を実施するにあたり、千葉都市モノレール他関連施設様のご協力をいただきました。関係施設との交渉及び体験中のサポート等において、本校事務局の皆様からご協力をいただきましたことを感謝申し上げます。また、体験中のサポートを、清宮先生にご協力いただきましたことを感謝申し上げます。

6. 文献

- 1) 成田伸、石井トク、「体験学習」の文献的考察、看護教育、34-2、1993.
- 2) 山本晴雄、鈴木敦省他、教育原理、福村書店、1980.
- 3) マッケイ, R. C.、ヒューズ, J. R.、(川野雅資、長田久雄訳): 共感的理解と看護、医学書院、1991.
- 4) インスタント・シニア ワークブック、日本ウエルエージング協会、1997.
- 5) 長田久雄、インスタント・シニアプログラム体験の影響、東京保健科学会誌、vol. 4、2001.
- 6) 日本ウエルエージング協会、シニア体験プログラムの効果に関する研究報告書、日本ウエルエージング協会、1998.
- 7) 工藤武重、21世紀に向けて街づくり、生活起点、1999.